

シェイクスピアが単独で書き上げた最後の作品を、2014年に初演、  
そして半分のキャストを新たに迎えた2017年版『K.テンペスト』が幕を開ける。  
ナポリ王アロンゾー、ミラノ大公アントーニオらを乗せた船が嵐に遭い難破、絶海の孤島に命からがらたどり着く。  
魔法の研究ばかりで政治を疎かにした元ミラノ大公プロスペローは、  
野心家の弟アントーニオらの策略で、娘のミランダともどもミラノから追い出された。  
空気の精エアリエル、醜い怪物キャリバンを従えて暮らしていた彼は、12年あまり過ぎたある日、  
アントーニオらが乗った船が島の近くを航行することを知り、復讐のために魔術で嵐を起こしたのだ……  
ロマンス劇『テンペスト』に「K」の魔法をかけた串田和美芸術監督。  
海辺の白い砂浜から着想を得て、いつか誰かが見た夢や記憶の集積であるかのような舞台を作り上げた。  
シェイクスピアが描いた物語もその一つに過ぎないかもしれない。

特集  
K.TEMPEST  
2017

# 『テンペスト』は プロスペローの魔法 『K.テンペスト』は 串田和美の魔法

シェイクスピアの翻訳を手がける松岡和子さん。今回も松岡訳をベースに作品づくりが行われている。  
「串田演出にはシェイクスピアのロマンス劇がよく似合う」とかねてから語っていたが、  
『K.テンペスト』初演でそれを改めて確信したそう。  
『テンペスト』のこと、初演のこと、そして2017年版への期待を聞いた。

INTERVIEW

松岡和子 (翻訳家・演劇評論家)

串田さんは昔から舞台と客席の境界をあいまいにしたお芝居をよく作っていらっしゃいますよね。出番を終えた役者が次の出番まで楽屋に戻るというのも好きではない。だから役者はずっと劇空間にいるし、お客様もそこにいる。『K.テンペスト』の初演を見た時はすぐに言語化できませんでしたが、振り返ると、四角く壁で囲ったアクティングエリアは物語の舞台となる島そのもの。お客さんは自由に席を選んで、アクティングエリアにも座れるし、少し離れた高いところにあるベンチ席に座ることもできる。だとすればお客さんは高い木とか、ごつごつした岩とか、砂であるかのように参加しながら、お芝居を間近に見たり感じたりできると思う。高い席のお客さんはもしかしたら神のような存在として芝居を見ているかもしれません。

ロマンス劇は、串田さんの視聴覚にかかわる想像力をいろいろな角度から刺激する要素があるから、串田さんもご自身のアイデアを全開にできる。日常的な人と人のやりとりから宇宙的なものまで組み込まれている『テンペスト』は特に合っているかもしれません。串田さんの頭の中にあるものがどんどん、どんどん物語の中に放出されていく、そんな感じがするんです。

『テンペスト』の最高の魅力は、演劇という魔法と、物語でプロスペローが使う魔法が一体化するところ。演劇って野暮なことを言えば、すべて板の上でしょ。でも、そこに海を見せたいと思えば見せることができる。『K.テンペスト』の劇中で模型の船を使って嵐を描くシーンがあるけれど、お客さんの想像力でいくらでも巨大なものとして感じることができる。つまり映画でリアルに描いたら一番つまらないの。それとは真逆をいく串田さんのアナログで想像力を掻き立てる演出。お得意の“見立て”が初演でも存分に活かされていましたね。可能ならいろんな席で見たいですね。きっと見る位置によって感じ方が変わるでしょうから。

そうそう、串田さんが砂浜に着想を得たというのも私には衝撃でした。黒い砂は岩が細くなったもの。でも白い砂はサンゴや骨など生物の欠片が細かく細くなったできた。『K.テンペスト』ではそれらの夢や記憶が劇中に挿入されているけれど、『テンペスト』は大自然がテーマでもある作品だから、その土台が土であり、砂浜だと考えれば、この芝居が大自然のサイクルの中に組み込まれているのを改めて感じます。

まつおか・かずこ

翻訳家・演劇評論家。東京女子大学英米文学科卒業、東京大学大学院修士課程終了。1996年よりシェイクスピア戯曲の翻訳を開始。ちくま文庫による既刊は『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』など32本。1995年、湯浅芳子賞を海外戯曲翻訳部門で受賞。日本シェイクスピア協会会員。国際演劇評論家協会会員。主な著書に「すべての季節のシェイクスピア」(筑摩書房)、「快読シェイクスピア」「もの」で読む入門シェイクスピア(ちくま文庫)、「深読みシェイクスピア」(新潮文庫)など。



玉置玲央

中村まこと

大鶴美仁音

キャストの半数が入れ替わった『K.テンペスト2017』には、東京の小劇場シーンを牽引する個性と力のある役者たちも含まれ、串田作品に新鮮で、刺激的な風を吹かせてくれている。その中から、中村まこと、玉置玲央、大鶴美仁音のお三方にてい談をお願いした。串田芸術監督は「作り方」についてのうわさが一人歩きしていることを苦笑いするけれど、実際の「作り方」は俳優陣にとってかなりの刺激になっているよう――。

# 『K.テンペスト2017』 座談会

撮影◎平林岳志



**中村** 僕は串田さんとは『漂流劇 ひょっこりひょうたん島』で初めてご一緒させていただいたんです。串田さんの演出は、役者だけでなく参加している人みんなにめちゃくちゃ考えさせるんですよ、いろんなことを。今回は『ひょうたん島』の苦しかった日々がよみがえる一方で、「いや、串田さんのことを知りたい、あの時は大きな座組みで制約もあったらうから串田さんがもっと自由に創作できる松本の稽古に参加してみなければいかん」と思ったわけです。串田さんの謎を解きにきました(笑)。

**大鶴** 『メトロポリス』を拝見した時は、「これは一筋縄ではいかないなあ」とけっこうビビっていましたが今は刺激的で、楽しくやっています。うちの父(状況劇場の唐十郎氏)と70年代のアングラ演劇を牽引してきた同志的な部分もあるのか、串田さんにも同じ匂いを感じて安心するところがあります。無茶なことをするのは同じ(笑)ですけど、ただ表現として出てくるものは串田さんの方がおしゃれ。楽しくて、どこか切なくて、懐かしい感じがあります

よね。父はロマンチックなものは作るけれど、表現は泥臭さかったりしますから。

**玉置** 僕は長塚圭史さん(松本では葛河思潮社『浮標』などを上演)と一緒に現場になった時に釘を刺されたんですよ。「次は串田さんとの仕事だろ。お前は頑固だけど、そんな姿勢でいたら痛い目に遭うぞ」って。ようは僕は結論を急ぐタイプなので、稽古場でイライラしていたら贅沢な時間を楽しめないぞというアドバイスだったんです。

**大鶴** それにしてもワークショップが楽しかった。ケチャにホームイ、ブルガリア民謡は歌の響きが素敵でしたね。

**中村** あと詩吟! 先生が話をするときにギャグを混ぜ込んでくるんだけど、こっちは笑っていいのかわからない。僕は子供のころから世の中や宇宙がどうしてこんなふうになっているのかぼんやり考えるのが好きで、大学の哲学科に進んだんです。芝居に夢中になって勉強はしなかったんだけど、この稽古場で、哲学のことが話題になって、みんなで話し合えるのが楽しい。

**玉置** 妖精とはどういうところにいるとか、分子や原子の世界である量子力学についてとか、目に見えないものの話をいっぱいしましたけど、芝居作りに関連ある作業なので楽しくやらせていただいています。

**中村** さっき「つらい」と言ったけど、普通の現場では、役者は自分の役をよくしようとする以外にあまり考えることはないんですよ。どうしてもそういうやり方に慣れてしまっているから、芝居作りのあり方とか逆にいろいろ考えさせられます。

**玉置** 台本があって役が決まると、どうしても作品を作るための最短ルートを走りがち。そういう意味で言えば串田さんの現場でしか味わえない時間。そうした時間を大切に、また台本や演出に生かされていくのは面白い経験です。例えばケチャやホームイは神というか、大いなる存在とつながるために生まれたもの。船が難破するシーンなんかを作りながら、もちろん教わった技術が出せているわけではないけれど、考え方として見えない存在とつながる方法、行為をやってきたのかと僕

串田さんが自由に創作できる松本での稽古に参加して、串田さんを知りたいと思った(中村)

特集  
K.TEMPEST  
2017

の中では腑に落ちていますね。

### 現実の実感が薄れ、 夢の実感が増す

**中村** 神奈川芸術劇場でのプレ稽古で夢の話进行いろいろするうち、うまく言葉にできないんだけど、過去のことに對する思い入れに実感があつたんだけど、それがだんだんなくなってきちゃつた。自分が少年の時に見た夢の価値が薄れたわけじゃなくて、昨夜見た夢と同等になっているへんな感覚に変わってきたんだよね。

**大鶴** それ、わかります。夢の話をしすぎたせいで、私は見た夢の原因や未来まで真剣に考えるようになってしまった。今まではどうでもよかつた夢が日常につながってきた感じ。

**玉置** 現実の実感が薄れ、夢の実感が増してきている、そうやって同等になっている。

**大鶴** それに夢について一人ずつ何か物語を考へて、キャストイングも自分で決めて発表するということをやつたんです。それぞれが夢に対して本当に違ふ考へを持っていて、表現もすごく多様で驚き

ました。

**中村** 僕は生まれた時から死ぬまで人生は全部決まっているんじゃないかと思つていて。いろんな人生が決まっている精子が胎内を冒険するうちに猿になったり、アメリカ大統領になったり、量子力学とちょっとつながっているというのを大河ドラマ風に作りました。演じる人は無言で、音楽の飯塚直さんが音楽をつけてくれて、しゃべるのは俺だけ。

**大鶴** まことさんの語りに合わせて動くんです。

**中村** 串田さん、最後まで精子だとは思わなかつたって(笑)。

**玉置** でも声を当てるというアイデアをすごく喜んでいらっしゃいましたよ。

**大鶴** 新しいって。

**玉置** どこかで使いたいわつて言つてましたよね。

**大鶴** 私は、たまたまへんな夢を見たんですよ。8年ぶりくらいに会う友達が「私、できちゃつた婚したの」と言うんですよ。それから顔見知りだけど誰だかわからないおじさんが親しげに近づいてきて「大腸ガンになつちやつた」と

言つて去つていく。あんまり不思議だつたので、なんとか形にできないかなと思つたんです。でも自分にとってすごく面白いんだけど、その面白さをみなさんに伝えたいのに、表現にするとどうにも伝わらないんですよ。

**中村** 難しいよね、「こういう感じ」つて人に伝えるのつて。

**玉置** そもそも形がないものですかからね。僕は、夢なのか記憶なのか妄想なのかわからなくなつてしまふことがあるんですよ。どうして自分にとってそれが現実だと認識できているのかと言へば、(心の)痛みがあるということ。痛みがあるまま、お話だけが変化して流れていくみたいなことを動きで表現してみたんです。

串田さんがなぜこの作業をやらせたのか意図はわかりませんが、舞台つて夢みたくないものじゃないですか。現実ではない。だけど目の前でやられているという意味では現実。白井晃さん演出の『夢の劇』(松本でも上演)に出演したんですよ。それは劇作家のストリンドベリが実際に見た夢を台本に起こしたものなんですけど、



なかむら・まこと

千葉県出身。劇団「猫のホテル」創設メンバーで、看板役者として活躍。阿佐ヶ谷スパイダース、NODA・MAP、イクウメなどの劇団公演から、『漂流劇 ひよこりひょうたん島』『フェノスアイレス午前零時』、『神なき国の騎士—あるいは、何がドン・キホーテにそつさせたのか?』、『冒した者』などプロデュース公演まで客演多数。フジテレビ「HERO」、関西テレビ「よろず占い処 陰陽屋へようこそ」、テレビ朝日「警部補 矢部謙三2」、CM「みずほ銀行 Power of Blue」など映像にも多数出演。短編映画「墮ちる」で主演を務める。



たまおき・れお

東京都出身。1985年生まれ。劇団「柿喰う客」の中心メンバーとして活躍。その他、『イヌの日』、残酷歌劇『ライチ☆光クラブ』、『夢の劇-ドリーム・プレイ-』、『朝日のような夕日をつれて2014』、『赤鬼』、『SEMINAR-セミナー-』、『真田十勇士』、『飛龍伝』など客演多数。NHK大河ドラマ「真田丸」で織田信忠役を演じたほか、NHKドラマ10「コビーフェイス〜消された私〜」(レギュラー)、NHK連続テレビ小説「花子とアン」、WOWOW「ヒトリシズカ」など映像への活動の幅も広げている。



おおつる・みにおん

東京都出身。1991年生まれ。3歳から父・唐十郎率いる唐組の公演を見て育ち、中学1年で映画「ガラスの使徒」(原作・脚本・出演:唐十郎 監督:金守珍)に出演。高校2年で唐組公演に出演したのをきっかけに女優を志す。唐組、新宿梁山泊、カクシンハン、トム・プロジェクトプロデュース公演などに出演。劇団唐組 改訂の巻「秘密の花園」は長野市城山公園、トム・プロジェクトプロデュース「挽歌」は茅野市民館でも公演している。

もう内容がめっちゃくちゃ。でもそれさえも舞台ではできる。夢に真実味を持たせることができたし、舞台の表現にも真実味を持たせることができる。それこそ『K.テンベスト』を見にいらつしゃるお客様が、舞台を見てどれだけ信じられるか、そのためのワークショップなんじゃないかなと思つました。

**中村** 僕らが時間をかけてやつたことが部分部分、作品に取り入れられているのもうれしいね。

**大鶴** 参加している一人ひとりが100%以上の発想力を投入して、串田さんが監督して見ている感じの稽古場。「K」以外にみんなのイニシャルを入れたくなるくらい、本当に全員で作っている。

**中村・玉置** そうだね。

**中村** 僕は串田さんのお芝居が、ことさら希望や絶望を叫ばないか

ら好きなんです。黒人ブルースマンのB.B.キングが、とんでもない苦勞をし、つらい思いもしてきたけど、「でも俺のブルースつてご機嫌だろ!」と言つた、それに近い気がするんですよ。そういうところを『K.テンベスト』をやつても感じるんです。

**玉置** 僕は今まで『テンベスト』を面白いと思つたことがないんですけど、串田さんがやろうとしていることを面白いと思つてほしい。それこそ『K.テンベスト』が夢みたくない時間だつたとお客様が劇場から帰っていく瞬間を作りたくて参加しているんです。串田さんはよく「次元」という言葉をおつしゃるんです。芝居を見てくださつたお客様が劇場から一歩外に出たら現実に戻るとか、役者が舞台を終えたら一般人に戻るとか、それが次元が変わるとつて

とかもつれない。串田さんがやろうとしていることは夢と現実の境目をなくすこと、もう串田さんの催眠術、魔法ですよ。

**中村** 世の中のことが、今までとは少し違つて見える、そんなきかけになりそうだね。

**玉置** 日常を尊く考へるようなことができたらいいいですね。僕らもお客さんも何10年か後に、この『K.テンベスト』が夢だつたのかなあと実感が濃くなつていくかもしれない。それが演劇の魔法でもある。

**中村** 『K.テンベスト』の「K」つて普通に考へたら“串田版”なんだけど、「おそらく、『テンベスト』だつたんじゃないの」という意味の、「きつと」の「K」じゃないかな。

一同 (笑)

「K」だけではなく、タイトルに参加しているメンバーのイニシャルを入れたい(大鶴)

『K.テンベスト』はさまざまな「次元」を曖昧にする串田さんの催眠術、魔法です(玉置)

## 井村君江 (英文学者・比較文学者)

シェイクスピアは  
人の深層心理を描くために  
妖精を使った

妖精学の第一人者、井村君江先生にお会いしてきた。  
東京大学を経て、渡英、ケンブリッジ、オックスフォード大学客員教授を経て、  
10年前に故郷・宇都宮に帰ってきた。  
“妖精の聖地”で手にした書物や絵画など大量の品々を寄付し、  
うつのみや妖精ミュージアム(名誉館長)、  
福島県妖精美術館(館長)も設立されている。  
さて、われわれが井村先生を訪ねた理由とは――

特集  
K.TEMPEST  
2017

## エアリエルは風の精霊

『K.テンペスト』初演時のこと。シェイクスピアの『テンペスト』にはエアリエルという妖精が登場する。妖精と聞くと日本人の多くはファンタジックな印象を持つ。つまり“フェアリー=fairy”だ。串田監督は稽古場で「エアリエルの正体ってなんだろう」と役者たちに語りかけた。翻訳家としても活躍する演出補・木内宏昌が原文を当たると、“スピリット=spirit”という単語が使われていた。串田演出はそのことから、また新たなイメージをふくらませていくから面白い。

そして再演の稽古を前に、串田監督は、2016年6月に刊行された井村先生の『新訳 テンペスト』(レベル)を手にした。

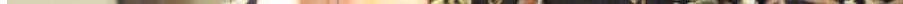
本の帯には「従来の訳では“妖精”とされてきたエアリエルは、妖精ではなかった。新訳で明らかになるシェイクスピアによる、フェアリー“妖精”とスピリット“精霊”の違い。妖精学の第一人者ならでは、妖精の視点とエリザベス朝時代の価値観からとらえなおした完全訳」とのキャッチコピーが踊る。

「シェイクスピアには37作品あるでしょ。その中で、フェアリーやその関連の言葉が出てくる作品は『リア王』『ヘンリー四世』など10あるんですよ。妖精が登場するのは『夏の夜の夢』と『テンペスト』。

そしてスピリットが出てくるのは『テンペスト』だけ。それがどういうことか知りたくて訳したの」

ファースト・フォリオ(シェイクスピアの戯曲をまとめて出版した最初の作品集で、『ペリクリーズ』を除く36作品を収録)をもとに訳されたそうで、「プロスペロー(Prospero)のスペルが3カ所間違っていた、最後のOが抜けていたの」というエピソードとともに井村先生は語り始めた。

「シェイクスピアはフェアリーとスピリットをはっきり分けて書いています。エアリエルはプロスペローに仕える使い魔“ファミリエル=familiar spirit”で、『夏の夜の夢』に出てくるフェアリーとは種類が違うんです。スピリットというのは地・水・火・風という4大元素に近い。つまり精霊ですよ。風の精霊です。お芝居の最後のほうでエアリエルが“空の下、愉快に何にもしないで遊ぶのさ”と歌います。プロスペローに頼まれた仕事を終えると、大気に戻って自由になるんです。そのエアリエルと対になるのはキャリバンで土の精。でもこれらは妖精と関係ないわけではありません。プロスペローは最後に“エルフ=elf(北欧神話における自然と豊かさを司る小神族。日本では妖精、小妖精と訳される)”と言っています。本も杖もいらぬ。すべてを捨てて自分は人間に戻ると語る長いせりふの中ではエルフを使っているんです」



「新訳 テンペスト」  
作:ウィリアム・シェイクスピア  
挿絵:アーサー・ラッカム  
訳:井村君江  
出版社:レベル



妖精と精霊。その違いに戸惑っていると、見透かしたように先生が続けてくださった。

「妖精の一部が精霊。精霊はいわゆる超自然の生き物としてのフェアリーとは違います。結局、myriad-minded Shakespeare、千の心を持つシェイクスピアと言うでしょ。シェイクスピアはいろんな心を持っている。妖精は彼の心象風景でもあるわけ。目に見えないものを見えるようにして、人間が見えるものと一緒に物語を紡ぐでしょ。つまり人の真偽は見えませんよね。よくイプセンは心理描写の劇作家と言われるけど、最初はシェイクスピアだと思う。深層心理を描くために妖精を使っているんだと思うんです」

イギリスでは多くの作家が  
妖精をもとに創作している

井村先生に「なぜ妖精に惹かれるのか」を聞いてみた。

「もういろんな理由があるの。日本だとファンタジーに受け取られるでしょ。そんな甘ったるいものじゃない。大人の内に潜んでいるものですよ。私の専攻は比較文学。学生時代に先生から文学とは昔話、つまりフォークロア、土地から生まれたものだ教え込まれたの。だから昔話や土地特有のものを研究しなさいと。イギリスには『ピーターパン』『不

思議の国のアリス』『砂の妖精』など素晴らしい児童文学がある。それらが描かれる背景には土地、時代、昔から今に伝わるものが大事だと言われ、学ぶうちに、いろんな文学作品がフェアリーをもとに生まれているのがわかった。そうやって私も引き込まれたの。ルイス・キャロルの『シルヴィーとブルーノ』も妖精の姉弟の話よ。ブルーノが最後にハムレットを演じる。アリスより面白いよ。舞台でやるというわって串田先生にお勧めしておいて」

井村先生のお話は続く。フリバティジベット(『リア王』)、ティターニア(『夏の夜の夢』)はシェイクスピアが創作したフェアリーだということ。坪内逍遙が日本で初めてシェイクスピアを訳したが、紹介したのは宇田川文海が先だということ。1613年に火事で全焼したオリジナルのロンドンのグローブ座を再現すべく、俳優で映画監督でもあるサム・ワナメイカーが基金を立ち上げたが、友人だった井村先生もそれを手伝ったということ。探偵小説でおなじみコナン・ドイルが妖精の写真を本物と信じた「コティングリー妖精事件」がもっとも長くもっとも多くの人が信じてしまった事件としてギネスブックにも掲載されていること。『シェイクスピアの影の国』(レベル)という先生の思いが詰まった本が春に刊行されること。それらの話はまた別の機会に。